

「イスラエルのガザ攻撃を悲しみ、憤る」

2024年04月15日

私は聖書を読んで、生きる意欲と希望を与えられた。聖書は、私を生まれ変わらせてくれた文字通りの「命の書」である。それ故、聖書を書き遺したイスラエル民族への深い敬意と感謝を抱き続けて来た。ところが、現在進行しているイスラエルのパレスチナ人に対する、殊にガザ地区へのジェノサイドを見て、悲しみと憤りを覚えざるを得ない。あのイスラエル民族がどうしてこんな残酷なことができるのかという思いで一杯である。

イスラエルとは、紀元前 1950 年頃、流浪の族長アブラハムの 3 代目の孫ヤコブに与えられた名で、「神が支配する」という意味である。そのヤコブの子どもたち 12 人から、12 部族からなるイスラエル民族が形成された。創世記には、神がアブラハムに「私はあなたの子孫にこの土地（パレスチナ）を与える」と、再三語っている。この言葉が、原理主義的ユダヤ教徒、また、米国の福音主義信仰者には、パレスチナはイスラエル人のものであるという理念になっている。しかし、聖書は古代文書で、書かれたこと全てが現代に通用するはずはなく、歴史的・批判的に読まなければならないことは自明のことである。

イスラエルはアブラハムから始まり、現代まで 4000 年の歴史を持っているが、国家として隆盛を極めたのはダビデ、ソロモン王時代のほんの数十年である。殆んどが他国に侵略、支配を受け、また、大国に貢物を献げて、辛うじて生き延びた民族であった。むき出しの暴力が支配する中、大国の狭間にあって苦難を舐め尽くした民族で、それ故に、人類最大の文化遺産と言える旧約聖書を生み出したと言える。ユダヤ教は、その旧約聖書に立っている。紀元 30 年頃、イエス・キリストが現れ、ユダヤ教の信仰を超える、神の名による人間解放をもたらした。キリスト教が誕生し、信託者により新約聖書が付け加えられた。

紀元 70 年に、ローマ軍がエルサレムを包囲し、苛烈を極めた兵糧攻めで陥落させた。この時から、イスラエル民族は国家を失い、ヨーロッパを中心に「ディアスポラ（散らされた）のユダヤ人」になった。ユダヤ人はイエス・キリストを殺した民族として、また、特異な宗教性のゆえに、差別と抑圧を受け続けてきた。その終局が、ヒトラーのナチズムによる、600 万人のユダヤ人が虐殺の悲劇である。世界大戦後、1948 年、国連の承認の下でパレスチナに「イスラエル国家」が誕生した。1900 年の歴史を隔てた国家再建は驚くべき民族意識であるが、ここには、当時の無責任な国際政治力学が働いていた。パレスチナ人が住んでいた所に、突然、イスラエル国家ができたものだから、両者の間で、世界の紛争の根源とも言われる争いが起こった。その争いが、悲劇的に増幅したのが、現在の状況である。米国のユダヤ人ロビーはイスラエルを支持して巨額の軍事支援をし、福音主義信仰者はパレスチナを神がイスラエルに与えた国であると主張する。彼らの後ろ盾により、イスラエルとパレスチナの間には大人と子どもほどの差があり、パレスチナ人の反抗に対し、数十倍ほどの報復を行っている。10月7日、ガザ地区を実効支配するハマースが、仕切られたフェンスを乗り越え、イスラエル人を攻撃した。イスラエルは、これをテロとして、容赦のない報復をして、4万人近い死者を出し、医療機関は崩壊し、今や、餓死者が出るほどの地獄状態を来たらしめている。その報道は、見るに忍びない残虐さである。イスラエルはかつて、兵糧攻めに遭い国家を失った。ホロコーストで 600 万人が無残に虐殺された。イスラエルはどれほどの苦難を体験したことか。ところが、同じ苦難をパレスチナ人に負わせている。この不条理をどう理解すればよいのか。イスラエル人が必死で国家を守ろうとする気概は理解できるが、あれほどの地獄を強いる軍事侵攻に、言い表せない悲しみと憤りを禁じ得ない。神よ、平和を与えてくださいと、ただ祈る。